

# 諸國お伽話

(左の諸篇は Eleanor L. Skinner And M. Skinner 兩氏編 "Nursery Tales From Many Lands." に於る)

## 日本幼稚園協會研究部

### ○赤ちやん羊

或る處に、小さなく赤ちやん羊が居ました。

いつもくうれしさうに、可愛い、あんだよ、あつちこつち飛びまはつて居りました。或る日赤ちやん羊は、お祖母さんのお家へ行きました、途々、今日はお祖母さんが、また、いつものやうに、おいしい物を下さるに違ひない、何だらう、お菓子かしら、お甘藷かしら、と思ふと嬉しくてたまらず、ビョン／＼飛んで歩いて行きました。しばらく行くと豺に逢ひました。豺は、

「おい／＼、赤ちやん羊、いゝ處へ來たね、さあ、お前を食べてしまふ」と云ひました。赤ちやん

羊はビョン／＼はねながら、

「豺のおぢさん、僕は今お祖母さん處へ行くので、そして、たと御馳走をもらふんだから、歸り道に、僕が肥つた處をたべたら良いでせう」と云ひました。

「む、そりや肥つてからの方が旨からう、歸りまて待つてゝやる」

と豺が云つたので、赤ちやん羊はトットと歩いて行きました。暫くすると虎に逢ひました。

「おい／＼、赤ちやん羊、丁度良い處へ來たね。さあ、お前を食べてしまふ」と虎が云ひました。赤ちやん羊はビョン／＼はねまはりながら、  
「虎のおぢさん、僕は今お祖母さん處に行くので

す、そして、たんと御馳走をもらふんだから、

歸り道に、僕が肥つた處をたべたら良いでせう」

と云ひした。虎は「む、そりや肥つてからの

方が旨からう、歸りまで待つて居てやる」

と云ひました。それから暫く行くと、今度は狼に

逢ひました。その次ぎには犬に、その次ぎには鷺

に逢ひました。どれも、どれも

「おい、赤ちやん羊、丁度い、處へ來たね。

さあ、お前を食べてしまはふ」

と云ひました。赤ちやん羊は、そのたんびに、

「僕は今お祖母さん處へ行くのです。そしてたんと

御馳走をもらふんだから、歸り道に、僕が肥

つた處をたべたらいいでせう」

と云ひました。それから赤ちやん羊はせつせと歩

いてやつとお祖母様のお家に行きました。そして、

「お祖母さん、僕はね、皆に肥つて大きくな

るお約束をしたのだから、あの野菜庫へすぐ入

れて頂戴な」

と云ひました。お祖母さんは

「あ、よし、坊やはい、子だから、すぐ野菜

庫へはひつてもいいよ」

と、云ひました。赤ちやん羊は、七日も野菜庫へ

はいつて毎日々々食べつづけたので、肥つて、

お腹がふくれて歩けないほどになりました。お祖

母さんはそれを見つけて

「まあ、坊やはするぶんよく肥つたね。さあもう

お家へ歸る方がいいよ」

と云ひました。すると赤ちやん羊は

「お祖母さん、それはだめよ。なせつて、僕はこ

んなに肥つておいしさうになつたから、外の獸

がたべに來るかもしれないね、さうでせう。だ

からね、お祖母さん、かうすればいいのよ。あ

の古い革で、玩具の太鼓をこしらへて頂戴、さ

うすると、僕がその中には入つて、うまく太鼓

をたいて行くの」

と云ひました。お祖母さんは、赤ちやん羊が云つ

たやうに、古い革で、中側には赤ちやん羊がはひつて暖かいやうに、むくく毛のついた太鼓をこしらへて下さいました。赤ちやん羊は大よろこびで、其の中へはひつて、ドンくたきながら轉ころげて行きました。暫くすると、鷺に逢ひました。

鷺は

「もしく、太鼓さんく、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。すると、赤ちやん羊は、太鼓の中で小さくなりながら、

「火の中へ落ちてしまつた、

お前も今に落ちますよ、

そーら、なれ なれ 小さい太鼓

タムバー タムトー」

といりました。鷺は、

「おやまあ、折角のいゝ物をなくしてしまつた。」と云ひました。赤ちやん羊はおもしろくて、玩具太鼓の中で、笑たり、うたつたりして、どんく

轉がつて行きました。玩具太鼓は、

「タムバー タムトー タムバータムトー」

となつて行きました。逢ふ獸もく、

「もしく、太鼓さんく、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。そして其のたんびに赤ちやん羊は玩具太鼓オモチャの中で、小さくなりながら

「火の中へ落ちてしまつた、

お前も今に落ちますよ、

そーら、なれ なれ 小さい太鼓

タムバ タムトー タムバ タムトー」

といりました。すると、その獸もく、

「おやまあ、折角のあんないゝものをなくしてしまつた」

と云ひました。赤ちやん羊は面白くてたまらず、笑つたり、うたつたりして、どんく行きました。そして一番おしまひに、豺にあひました。豺は、びつこをひきく、弱つたやうな顔をして、歩いて

ゐましたが、小さな玩具太鼓がどん／＼轉じて來るのを見ると、

「太鼓さん／＼、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。赤ちやん羊はまた太鼓の中に小さくなつて

「火の中へ落ちてしまつた

お前も今に落ちますよ

そーら 鳴れ 鳴れ 小さい太鼓

タムバ タムトー タバム タムトー」

といりました。けれど豺は赤ちやん羊の聲をよく覚えてゐましたから

「お、赤ちやん羊、お前は太鼓の中にはひつて

ゐるね、さうだらう」

と云ひながら、小さい玩具太鼓を破つて、一呑みに肥つた赤ちやん羊をたべてしまひました。(西印

度伽嘶)

### ○正直お爺さん

或る處に、大そう貧乏なお爺さんがあつた。このお爺さんはまた大層<sup>スナホ</sup>正直な善い人だつた。それで近所の人達はお爺さんのことを「正直爺さん正直爺さん」と云て居た。

正直爺さんは、いつも、お椀を持つて居た。

そのお椀はた／＼と太鼓のやうになつた。正直お爺さんは大層貧乏だつたから、毎日彼處<sup>アツチ</sup>此處<sup>ココチ</sup>と乞食をして歩いた。或日、他處<sup>ヨソ</sup>の家へ行つて、何か食べる物を下さいと云ふと、其處の家の者は、

「あつちへお出、あつちへお出、正直お爺さん、

お前になんかやるものは、いつまでたつてもないよ」

と云つた。又次の家へ行つて何か食べる物を下さいと云ふと、其の家の人も、

「あつちへお出、あつちへお出、正直お爺さん、

お前になんかやる物は、いつまでたつてもない